

ESD 先進地岡山から
← 地域をつくり 未来を拓く 公民館 ～集い、学び、協働する～

【第1回】**岡山市立公民館大会**



【とき】 2018 **2/12** 10:00 (9:30 受付開始)
[月] 16:00 (振替休日)

【会場】 **岡山市立中央公民館**
岡山市中区小橋町1-1-30
(岡山市福祉文化会館内)

報 告 集

(作成・発行) 岡山市立中央公民館・第1回岡山市立公民館大会実行委員会

岡山市立中央公民館 〒703-8293 岡山市中区小橋町一丁目1-30

TEL : 086-272-7886 FAX : 086-271-1384

目 次

1	実行委員長あいさつ	1
2	基調講演	3
3	分科会のまとめ	21
	第1分科会（地域の子育て支援）	22
	第2分科会（防災・減災）	25
	第3分科会（地域福祉）	28
	第4分科会（若者の参画）	31
	第5分科会（地域づくり）	34
4	第1回公民館大会開催ストーリー	37
5	アンケート結果	47
6	資料（チラシ・ポスター）	62

ご 挨拶

第一回岡山市立公民館大会が、岡山市立中央公民館主催で開催され、岡山市内中学校区の全37公民館代表職員と、各館エリアの市民とが一堂に会して開催され、日頃の公民館活動を紹介し、地域が抱える課題・公民館のあるべき姿について、忌憚なく意見交換することが出来ました。

この公民館大会は単に公民館職員の為の大会ではなく、市民協働で開催したものであり、全国的にも先進的なことでした。私も一市民ではありますが、このことを誇りに思い、市民との協働で開催することを企画された公民館に対して、深く敬意を表する者であります。

また、ご参加をいただきました市民の皆様には、厚く御礼申し上げます。特に本大会では、日頃公民館を利用されていない方や高齢者から学生たちなど世代を超えて多数の参加があり、内容の濃い討議が為され、市民と公民館職員の有意義な交流ができたのは画期的なことでした。

当日、ご来賓として岡山市教育委員会教育次長安田充年様、東京大学名誉教授佐藤一子先生にご臨席賜り、佐藤一子先生には、「地域をつくり未来を拓く公民館」と題しての、ご示唆に富んだ基調講演をいただきましたこと、また、最後の全体会議でも、貴重なコメントもいただき、厚く御礼申し上げます。

また、日頃各公民館におかれましては、各地域の特性を生かしつつ、我々市民に学びの場を提供していただき、この場を借りまして深く感謝申し上げます。

もとより、公民館は生涯学習の場であり、第一線を退かれた方にとっての学びの場では有りますが、学校教育では学べないことが学べる場所、幼児から児童、学生そして、現役の社会人に取りましても、心を落ち着かせ、人間力を養う場所でなくてはなりません。そうした意味合いに於いて公民館は、家庭と並び称されるものではないかと私は考えます。

午後からは5つの分科会に分かれて発表や討議がなされましたが、いずれも重要なテーマです。共通して言えることは、私たち人間も自然の一員であり、仲間や大自然のなかで活かされているという意識で、自然を大切にすることを養い、絆を深めることがなければ解決できない問題ばかりです。ESDの観点から自然循環型社会を構築する為に、公民館の果たす役割はとて大きなものがあると考えます。

本大会が市民協働と言う意味で新しい時代の幕開けとなりますことを祈念してやみません。この大会開催に向けてボランティア精神を発揮され、ご尽力、ご支援いただきました多くの関係者の皆様には、衷心よりお礼申し上げます。

第一回岡山市立公民館大会 実行委員長 内田 武宏

基調講演「地域をつくり未来を拓く公民館～E S Dの推進からみえてくる地平～」

佐藤 一子（東京大学名誉教授）

*はじめに

皆様こんにちは。ご紹介いただきました佐藤です。この岡山の37の公民館の第1回大会にお招きいただきまして、大変光栄に思っております。また、緊張もしています。幸いお天気も素晴らしいので、皆様のお力でこのホールが満席になりました。皆様の公民館に対する期待・熱意・行動力に圧倒されながら、本日一日の研究大会が本当に有意義なものになることを期待しつつ、お話をさせていただきたいと思います。

さきほど、内田委員長から「公民館というのは職員だけで運営されるのではなくて、市民と協働して初めて本当の公民館活動が始まるのだ」というお話があったと思います。この思いはおそらく公民館を戦後から今日につなげてきた全国各地に共通する思いではないでしょうか。

ちょうど先週、東京都公民館連絡協議会の研究集会が開かれ、私は一つの分科会に参加させていただきました。やはり250人ぐらいの集まりで、市民と職員が半々ぐらいの集まりで、本当に公民館というのは、市民の力によって魂を得られる、それを職員が黒子となって支える、そして、そういう形で70年という歴史を刻んできた実感します。

この岡山でも、すでに50年近い歴史があると聞いていますが、先程来、ご紹介にありますように、岡山がE S Dという大きな目標を掲げることによって、新たに国際社会の中での公民館の立ち位置をめざし大きな一歩を踏み出したと思います。その意味でも、今回の第1回公民館大会が皆さんにとって、E S Dって何だろう、これからの公民館はどう歩んでいくのかをめぐって、一緒に考えていける場になればと期待しています。



今日お話しする4つの柱について、はじめにご説明します。今、全国的に公民館が地域づくりをめざすということで、関心が高まっています。20年ぐらい前には公民館は生涯学習、個人の生きがい強調される時代があって、特に都市型の公民館は生涯学習ということで、多様性を強調する時代がありましたが、現在どの公民館でも地域づくりというテーマを掲げています。これは公民館の古くて新しいテーマだと思いますが、なぜ今、地域づくりなのかということ、第1の柱でお話したいと思います。

それから第2の柱としては、岡山がE S Dの推進を掲げていますが、地域づくりということで捉えれば、全国的に共通するテーマだと思います。しかしE S Dという横文字になると、やっぱりよくわからないということで、なかなかそこまで手がでないという公民館が全国的には多いと思

います。岡山はこうした国際的なテーマと地域の公民館活動をつなぐというところで、非常に先進性のある公民館活動に踏み出していると感じております。どういう点が岡山の先進的な活動として注目されるのかについて2番目の柱でお話したいと思います。

第3の柱はこのESDの内容に関わって、これは生態系の保護、持続可能な社会づくりとされていますが、それをグローバルなところで叫んでも実現するものではなくて、地球上のそれぞれの地域でそれぞれの足元で作りだしていかなければならない。そういう足元からの構築がなされなければいけないということで、岡山の実例が午後から発表されますが、ここでは私自身がフィールド調査で関わっている山形県の鶴岡市の事例とイタリアのスローフードについてご紹介してみたいと思います。

そして、最後にこのESDを推進することがどういう学びであり、どういう地域が作られていくのかについて、問題提起をして講演のむすびとしたいと思います。

1. 今、なぜ「地域づくりをめざす公民館」か

(1) 都市型公民館の模索—新たなステージ

第1の柱として、今なぜ「地域づくりをめざす公民館」が重要かという問題です。いうまでもなく公民館にとって地域づくりは古くて新しいテーマです。戦後の寺中構想によって公民館が発した時から、地域づくりのために公民館があると言われていたわけですね。それは昨年のプレ大会で、千葉大学の長澤先生が詳しく紹介されて記録も作成されていますので、ぜひそれをお読みいただき、確認していただきたいと思います。

寺中構想イコールまちむらの再興・復興、公民館をむらの茶の間にする、みんなが集まって将来を考えていくということで公民館が生まれたわけですね。戦後直後から50年代にかけて35,000館ぐらい一気に広がりました。いかに当時、戦争で疲弊していた日本社会にとって、みんなが集まって自由に話せる場所が必要だったのかということが、この35,000館という数に表れています。

その後次第に公民館は公共の整備を通じて、中央館などが分館を合併するような形で数としては減少し、18,000館ぐらいになりました。2000年代に入って公民館がまちづくりセンターなどに移管されるなどの再編によって、統計上はさらに減っています。この70年に及ぶ公民館のあゆみを振り返って、都市型公民館が生まれてきた1970年代初めから80年代にかけてを画期として、そこから今ということを考えてみるのが、一つの視点を与えてくれるのではないかと思います。長い歴史をたどることは省きまして、70年代以降の都市型公民館は何をめざしてきたかをふまえて、岡山の現在を振り返る手掛かりになればと考えてお話したいと思います。

都市というのは農村とは全く違います。都市型公民館と言われるようになったのは、東京のベッドタウン、あるいは大阪のベッドタウンに70年代以降公民館が設置されて、新たな公民館像が模索される状況を表しています。岡山は合併をした地域はもちろんですが、比較的農村型の公民館も複合されていて、都市型、農村型の統合型が岡山の姿だといえるかもしれません。

一般には寺中構想では「町村の公民館」という言い方をしました。東京など大都会にはほとんど公民館の設置がみられませんでした。東京都23区内には3館しかなかったんです。今は全くありません。ですからそもそも公民館は、農村には数多く定着したけれども、都市の生活と公民館という点では、あまり密接な関係が無いままにずっときていたんですね。

ところが、1960年代から70年代、高度成長期の終わりの頃から、東京都の周辺の多摩地域のベ

ッドタウンの公民館づくり運動が広がっていきます。都市の住民にとっても公民館は必要なんだという市民ニーズが高くなって、当時まちづくりでは都市計画の一環に公共施設の配備計画が進められており、多くのまちで図書館と公民館がトップに位置づけられる時代でした。学校の建築が一段落したということもありましたが、図書館や公民館を建てるのが、つまり社会教育施設の建築が都市計画の中で市民ニーズのトップになるという時代状況が70年代に生まれて、もとはまちむらの茶の間だった公民館が、都市住民にも必要な場所となってきた時代です。この時代を公民館の設置が広がる第2ステップとして、公民館の歴史を捉えることができるのではないかと思います。その象徴が1974年に東京都教育庁から出された「新しい公民館像をめざして」であったと思います。実態としては農村型と都市型が複合しているのですが、あまりはっきりと都市と農村を分けるのは正しくないと思いますが、ここではわかりやすく大都市ベッドタウンの公民館という意味で、従来の集落に基礎を置く公民館とは違う都市型の公民館という捉え方をしておきます。

ここでは何が特徴的であったかという点、それぞれの人が必ずしも地縁的なコミュニティには属していないという生活が一般的だったということです。岡山では比較的職住近接のライフスタイルの方が多いかもかもしれませんが、大阪、神戸、名古屋、東京などでは1時間以上離れた周辺地域から中心部に働きに行くことがあたりまえなので、足元の地域に対して都市住民は無関心で所属意識をもたないことが多いですね。自治会を一生懸命担っている地元の方はいらっしゃるけれども、男性・サラリーマン・若者は、全く地域と関係がない生活をして通勤・通学で時間を取られてしまうというライフスタイルが一般的で、そもそも都市住民が地域に根ざすということが非常に難しい。高度成長期以降の都市的な大衆消費社会と言われる生活状況のなかで、このようなライフスタイルが広がっていたことは、地域と関わるという面では弊害となってきたと思います。このベッドタウンで公民館が欲しいという住民運動が起きた背景には、お母さん方が子育てをするのにお互いに繋がらなかつたら子育てが孤独でばらばらになってしまうという事で、一緒に集まる場所が欲しいという動きが起きてきたことが大きな要因であったといえます。つまり公民館づくり運動の大きな担い手として、当時は働いていないお母さん・専業主婦の方々、地域に参加したいけれども地元の町会などには知りあいがいないという、いわゆる新住民といわれる人々がネットワーク・繋がりを求めて集まり、新しいまちづくりを始めたということが、公民館をつくっていく大きなパワーになっていったといえると思います。

(2) 1990年代以降の変化

こうして都市型公民館が広がってきたのですが、1990年代から2000年代にかけて社会は大きく変化して、まず専業主婦と呼ばれる人たちがほとんどいなくなりました。皆さん働いていますね。子どもが幼児の時はご家庭にいらっしゃるかもしれないですが、働いている女性が多くなって、若いお母さん方が公民館を活動拠点にしていきいきと公民館に関わるというかつての状況は大きく変化しています。

それから、これは実際に若者の変化でもあり、社会の変化でもあると思いますが、学校中心社会、つまり学歴が高くなければ世の中で一人前ではないというような、日本の学歴社会・学校中心社会という価値観の広がりがあります。これは子どもを持つ多くの親たちに共通する考えでもあると思いますが、そういうことによって、次第次第に社会教育というものの大事な意味が見失われてきた、教育観の変化という問題があります。私も前任校の法政大学などで学生に「公民館っていうとどういうイメージですか？」と聞くと、「暇なお年寄りが囲碁をしている場所」という

ような答えが返ってきます。ところが、半年間社会教育とか生涯学習のことを授業で学んでいるうちに、「先生、どうして子どもたちに学校教育だけじゃなくて社会教育っていうのがあるということをお教えないんですか？」と問い返すように変わってくるんです。つまり今になって社会教育とか生涯学習を教えられたって遅い。もっと子どもの時から知っていたかったということですね。そういうふう子どもたち・学生たちが言うようになるくらい、今の社会では、教育イコール学校という教育のとらえ方が一般的になっています。

日本は非常に国民の高学化が進んでいて、その意味では発展途上地域に比べれば、恵まれた教育社会なのかもしれませんが、逆に皆さんがE S Dで世界各国の方々と交流したときにお気づきになったと思いますけれども、学校だけで教えられることは限りがある、地域社会・生活の中で学ぶということを失ってしまったら人間は一人前になれないというとらえ方が当たり前の教育観なのに、日本ではそこが失われています。必要な情報などはスマホで何とかなるみたいな学習社会・情報社会になっているという傾向が、特に2000年代に入って顕著になってきています。

公民館という場は皆で共同の学びを作るところだと、戦後ずっと学習実践が共有されてきたと思いますが、サークル活動の場所を借りられればそれで良いという、いわゆる学習に参加する意識ではなくて、単なる場所の利用者という意識が公民館についても広がってきました。それなら別に公民館に職員がいなくてもいいのではないかということで、自治体の財政合理化の背景もあり、公民館から職員を引き上げる、単なる貸施設にしていくという、そういう動きが全国的に広がっています。



社会全体が高学歴化して、社会教育の存在感が見えにくくなっている現代において、公民館の役割とは何なのかということを考えないと、特に都市部で公民館は一般集会施設と同じように捉えられることになってしまいかねない。高度成長期以降に、都市部に公民館が広がった第二の段階に比べると、今はその公民館の将来をいったいどう考えたらいいいのかということが問われる第三の段階に入りつつある、あるいはすでにもう入っているということができると思います。

若いお母さん方が自分たちの子育てを一緒にやっていきたい、そして子どもたちも大人たちも一緒に育ち合っていきたいという思いをベースにつくり出してきた公民館ですが、一方で現代の公民館では、多くの高齢者が孤立化していて、互いに手をつなぐ場所の必要性が強く言われています。

それから、高度成長期以降日本社会は、一億総中流でみんな同じような暮らしをしているというように捉えられていたのが、2000年代に入って、かなり貧富の差が大きくなっています。OECDの統計で見ても、日本の子どもたちの貧困率はかなり高い数字を示していて、均質な中流層という実態ではなくなっています。子どもの貧困という問題に目を向けなければいけないという問題意識、あるいは不登校、これも何十年も続く問題ですが、不登校のまま引きこもりになった方々が、日本社会に数十万人もいて、40代・50代になっているということも想定されています。

す。そういう方たちは、親御さんが亡くなったらどうするんだろうというような問題もだんだん顕在化しています。若者の自立の支援をしていかなければいけない。むしろ農村よりも都市に生活の困難が広がっているということも、2000年代の特徴であるわけです。

そういうことを考えたときに、改めて本当に地域社会の中で、人々が皆お互いに助け合いながら、様々な文化を共有しながら、共にコミュニティをつくっていく、その拠り所として公民館がもっともっと地域に根ざさなければならない。見えない部分の人々の声に耳を傾けていかなければいけない。そのための地域づくりというものをあらためて考えていく必要があるのではないかと。このような課題意識が先進的な公民館の側から模索されている状況になっているのではないかと思います。そういう意味で、一人ひとりの生きがい、多様な活動、それは大事なんだけど、合わせてやはりどういう地域社会なのか、どういう繋がりが本当にその中に息づいているのか、そういうところを問い直す公民館のあり方ということで、今地域づくりをめざすということが、全国的に特に都市部で、農村は改めて言う必要がないという面もあるので、特に都市部でこのテーマが大きく問われ始めてきている状況にあると思います。

（3）「新しい公民館像をめざして」（東京都教育庁社会教育部、1974年）の意義をふりかえる

1974年の「新しい公民館像をめざして」は、岡山の公民館にも影響を及ぼしているかもしれませんが、4つの提言をしています。

まず公民館は「住民の自由なたまり場」ということで、ロビーにふらっとやってくる、そこで参加できる共同の広場というイメージが描かれています。それから集団活動の拠点ということで、サークルを非常に大事にしています。非常にたくさんのサークルが登録している。そして自由に公民館で出会っている。そして「私の大学」です。これも当時強調された言葉です。日本の社会教育は、どちらかというとサークルの中の話し合い学習が活発でしたが、もっときちんと系統的な知識を持たなければいけないということで、講座型の学習、あるいはその講座型の学習も単なる承りではなくて、住民参加によって企画運営委員会が内容まできちんと組み立てるような自主企画講座。こうしたことが私の大学の中で提言されてきました。そして最後に、文化創造の広場ということで、表現活動とか発表会、公民館祭とかロビーでのコンサートだとか展示活動などが活発に行われています。

都会の場合は、こういうふうな公民館を利用する市民の様々な集まり、ネットワークで交流が広がっていくわけですが、私の関係している東京周辺の自治体ですと、自治会という地縁的な組織と公民館で作られるコミュニティが必ずしも一体的ではない、なんとなく少し離れている。自治会の中でも公民館に関わろうという方も個人ではいらっしゃるけれども、自治会として公民館活動に大きな影響を持っている農村部の公民館とは違う。ですから都市型・農村型と分けるときに、地域の自治会、集落でみんなが寄り合う地縁性と公民館運営が不即不離の関係をもっている農村的な特徴と、必ずしも地縁性にもとづかない都市的な特徴の違いがでてくると思います。都市でも自治会などとの対話をもっている場合もありますが、参加の単位が個人であり、サークルであるということです。農村部ではもともと公民館以上に、まず自治会でつながっていて、切実な問題は一緒にそこで議論していますので、そういう基盤に支えられて公民館活動が進められている。新しい形でのコミュニティを作って、まちづくりの方向性にむけた市民の意識を高めていこうということをめざしたのが東京都教育庁の提言だったのではないかと思います。

(4) 「古くて新しく」そして「未来志向的・次世代型」公民館のあり方

この提言が1974年だったわけですが、その後の公民館活動の中でいろいろ地域づくりが意識されるようになりました。都市型公民館の中でも古くからの農村型公民館にあったような活動のあり方を取り戻して、まさに未来志向的次世代型、つまり、その地域が持続可能な地域になっていくことをめざす公民館の動きが近年各地に出てきています。

積極的な活動事例ということで、いくつか紹介しておきたいと思いま。まず課題解決ということと、人とのつながりがキーワードになる公民館活動です。高齢化した利用者層が増えているわけですが、高齢者の方々が今までは60歳で定年、平均寿命が70代だったのが、今では80代半ばとなりました。そして100歳まで生きなきゃいけないというか、生きられるというか難しいですが、長寿社会というものが身近になりつつあるということで、年齢層が50～90歳代くらいまで幅広い年齢層の高齢者に広がってきています。その中で大きな問題になるのが、仕事一筋だったサラリーマンだった方や大きな工場に勤めていたような方々が定年になったときに、どのように地域でつながりをもつのか。まるで勝手がわからないという男性の方々がたくさんおられます。私の知り合いなどは大きな自治体の部局長までされた方ですが、定年になったら行くところはパチンコ屋だけ。冗談でなく、そういう方もおられます。やはりもっと誰もが生きる権利、人間である権利として、「定年になったら楽しくいろんなことしましょうよ」という場、自己実現ですよ。そういうことがひとつ課題解決の柱になって新たなとりくみがいろいろ始まっています。

(5) 課題解決型学習と人々のつながりを生み出す公民館

それから個人だけではなくて、今日の分科会にもありますけれども、地域の課題解決ということで、都市部でも先ほど自治会の問題を申し上げましたが、自治会も含めて福祉、環境、防災、自治というところで新たな学習、そして様々な活動が生まれていることも注目されます。福祉との連携で高齢者自立支援とか、いろんな人が一緒に暮らしていけて、なるべく長くお互いに助け合って自主的な生活を管理しながら、生きていく能力を身につけなければ、おそらく自治体の福祉予算がパンクしてしまうのではないかという状況になりつつあります。あるいは病院にしても医療システムにしても、ケアシステムにしても、とても対応できないということがもうあと数年後に迫っているわけです。そういうことでやはり学ぶということと、ともに暮らす、関わり合うということを結びつけた課題解決の方向性が大きなテーマになってきていますし、環境、防災、これも言うまでもなく、非常に重要なテーマになっています。ほとんどの自治体で防災の訓練はやっていますけれども、訓練だけで話が済むことではありません。災害に強いまちづくりをしなければいけないわけで、そのまちづくりをしていくのはやはり住民の生活の場でなければならない。そういうところで自治会との連携とか、公民館での話し合いのネットワークからまちづくり協議会を発展させていくという動きをめざして、公民館活動がそれを促していくというような地域課題解決学習、これは必須のテーマになってきていると思います。

(6) 連帯とネットワーク推進の拠点となる公民館

そしてもうひとつは、お互いが個々人ばらばらということを乗り越えて、つながり合う社会というもので、とてもキーワードとして大事にされてきているのが、世代間の交流と多文化、外国人の方々との交流、この二つの視点が重要です。先ほどの学生の話ではありませんが、子どもからずっと公民館、地域というところに接点を持たないまま育ってしまった若者がとても多く

なっています。今は地域で遊ぶという姿もあまり見られなくなってきました。そういう意味では、公民館が学校や児童館とつながりながら、大人と子どもが出会い、交流し、様々に学び合えるような文化的な交流をどう生み出していくか。岡山では、子どもの文化団体などが非常に活発に子どもの参加を進められているとお聞きしていますが、公民館という安心できる場所だからこそ実現できるということで、世代間交流が活発になってきています。

その中でやはり困難をもつ子ども、若者、あるいは障害者、そういう人々に、どう公民館活動をきっかけにした世代間交流に手を差し伸べていけるのかということが大きなテーマになって、就労支援であったり、子どもたちの体験学習であったり、多摩の公民館で有名なのが障害者自立支援ということで、障害者が営業する喫茶室が公民館のロビーで開かれている事例もあります。

私が今公運審の委員長をつとめている国分寺市では、障害者の支援団体が3か所の公民館で朝から閉館までコーヒー類とランチを出していて、ランチが500円で50食くらい出ています。普通のサラリーマンが「よそより安い」と言って食べに来たりしています。これは障害者の働く場所、つまり共同作業所になっています。有機野菜の産直も行われています。ですから普通、公民館のレストラン経営は少ないと思いますが、障害者自立支援という公民館活動の目的、そして勿論障害者青年学級があつての支援活動です。そういう障害者青年学級と自立支援と、そして作業所みたいなものが、公民館ロビーという公共の場所で、食事提供事業を行うようなことができています。これも20年以上の長い歴史を経て生まれてきている実践ですけれども、こうした困難な人々に手をさしのべる、相互扶助が生まれていることも世代間交流の例であると思います。

多文化交流についても、外国人の日本語教室として発展してきました。先日も埼玉にある多文化交流のNPOのお話を聞く機会がありました。日本語教育だけではなくて、生活支援が非常に大事になっている。そのために、何でも話せるという関係をつくらないと本当の意味での外国人支援はならないということで、日本語学習も大人から子どもまで、いろいろなレベルで開いていますし、生活相談を行ったり、料理教室などを開いて一緒に気楽に話し合えるしゃべり場をつくってみたり、様々な多文化交流が進んでいます。ネットワークという意味では多文化共生ということが大きなテーマになってきていると思います。

また、公民館はどちらかというと地区内で自己完結している施設というふうに考えられがちですが、その内容やテーマによって、全県的あるいは全国的あるいは世界的に活動しているNPOやボランティア団体、あるいは様々な経験を持っている専門機関の方々と、課題を共有しながら連携していくという方向性も、その活動の内容によって必要になっていると思います。長野県の公民館などでは、保健師さん達とか教員達との連携が活発ですけれども、国際NGOとか、ユネスコ協会などとの連携によるグローバルな問題へのとりくみ、地域や国境を越えた連携というものを、どの様につくっていくのかということも次世代型ということで問われているのではないのでしょうか。

2. ESDの推進をかけた岡山市公民館の先進性

(1) 公民館から「地域学習」のネットワークへ

岡山市の公民館は非常に先進的だと私は外からの目でそう感じていますが、どういう面が先進的と感じるのか、いくつかの点をあげてみたいと思います。

今日は会場で私の2冊の本を販売していただいているのですが、その一つは『地域学習の創造』